

SHOW HEY シネマルーム

★★★★

ライズ・オブ・シードラゴン 謎の鉄の爪

(狄仁杰之神都龙王 / Young Detective Dee: Rise of the Sea Dragon)

2013年・中国、香港映画

配給/ツイン・133分

2014 (平成26) 年8月11日鑑賞

シネマート心齋橋

Data

監督・脚本・製作：徐克 (ツイ・ハーク)

脚本：チャン・チャルー

アクション監督：元彬 (ユエン・ブン)

音楽：川井憲次

出演：趙又廷 (マーク・チャオ) / 金汎 (キム・ボム) / 馮紹峰

(ウィリアム・フォン)

更新 (ケニー・リン) / 楊穎

(アンジェラベイビー) / 劉

嘉玲 (カリーナ・ラウ)

👁️👁️ みどころ

私とほぼ同世代の徐克 (ツイ・ハーク) 監督は、今や張藝謀 (チャン・イーモウ) 監督以上、また、スピルバーグ監督以上！第1作『王朝の陰謀判事ディーと人体発火怪奇事件』(10年)に続くシリーズ第2作たる本作では、製作費だけでなく、弾けぶりもすごい。もっとも、若手イケメン俳優の総動員ながら、私のような世代には前作に懐かしさも・・・。

最近、アレハンドロ・ホドロフスキー監督の『リアリティのダンス』(13年)や、蔡明亮 (ツァイ・ミンリャン) 監督の『郊遊くピクニック』(13年)など、「何でもあり！」を持ち込む監督が目立つが、本作もその一つ。

『300 スリー・ハンドレッド』シリーズの第3作は未定だが、本作はシリーズ第3作が決定。そのテーマが本作以上にハチャメチャとなり、本作以上の楽しさとなることを期待しよう。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■ ツイ・ハーク監督も第2作は「海戦」をメインに！ ■□■

『キネマ旬報』2014年8月下旬号は、「INTERVIEW」として本作の徐克 (ツイ・ハーク) 監督を3頁にわたって「香港のスピルバーグからキャメロンへ」と紹介している。ツイ・ハーク監督は1950年2月生まれだから、ほぼ私と同世代。そんな彼が80～90年代にプロデューサーとしての手腕を発揮して作った『ワンス・アポン・ア・タイム・イン・チャイナ』『男たちの挽歌』『チャイニーズ・ゴースト・ストーリー』などを、私はテレビでしか観ていない。しかし、『SEVEN SWORDS セブンソード』(05年) (『シネマルーム17』114頁参照) は「中国・香港・台湾・韓国のスターを総動

員した、『これぞ武俠映画！』というべき、エンタメ巨編の最高峰」だった。また、『王朝の陰謀判事ディーと人体発火怪奇事件』（10年）は、私が「今や張藝謀（チャン・イーモウ）以上、またスピルバーグ以上！」と評価した映画だった（『シネマルーム28』119頁参照）。さらに、『ドラゴンゲート 空飛ぶ剣と幻の秘宝』（11年）も、「4人の美女に注目しつつ、権力と義、愛と欲が入り乱れる、『これぞ武俠！これぞワイヤーアクション！』の展開をタップリと堪能したい」娯楽作だった（『シネマルーム30』252頁参照）。

他方、ザック・スナイダーが脚本を書き、監督した『300 スリー・ハンドレッド』（07年）はモノトーンで劇画タッチの斬新な映像が魅力だったが、同時にストーリーもメチャ面白い映画だった（『シネマルーム15』51頁参照）。同作によって、「スパルタ教育」の原点や紀元前5世紀のペルシャ戦争や同作がテーマとした「テルモピュライの戦い」等について勉強できた人は多かつたはずだ。しかして、2匹目のどじょうを狙った『300 スリー・ハンドレッド』シリーズの第2作、『300<スリーハンドレッド> ~帝国の進撃~』（14年）は、『二〇三高地の激戦』があれば、『日本海海戦』もあるさ！」と同じように、『テルモピュライの戦い』があれば、『サラミスの海戦』もあるさ！」と言わんばかりに、サラミスの海戦をテーマにしたが、さて、2匹目のどじょうを狙った判事ディー・シリーズ第2作のテーマは？

前作『王朝の陰謀 判事ディーと人体発火怪奇事件』で、唐の時代にいた中国版シャーロック・ホームズこと判事ディーを世界的有名人にしたツイ・ハーク監督は、シリーズ第2作の本作で判事ディーがあらん限りの推理力を駆使して立ち向かうターゲットを、海中に潜む龍王（シードラゴン）とした。冒頭に展開される大スペクタクルシーンは、西暦665年、唐朝末期、第3代皇帝・高宗と皇后・則天武后（劉嘉玲／カーリーナ・ラウ）が敵国・扶余に送り出した10万人に及ぶ水軍艦隊が、謎の黒い影の襲撃を受けて壊滅してしまうシーン。『300 スリー・ハンドレッド』では、紀元前5世紀の冒頭的大海戦シーンが、その後のペルシャVSスパルタ・アテナイ連合軍の次なる戦いに結びついていったが、7世紀に栄華を極めた唐の都と、東方にある異民族の国「扶余」との対立は如何に？そしてまた、扶余のリーダーたる雀義（フォ・イー）（胡東／フー・トン）は、大唐帝国に対していかなる陰謀を・・・？

■劉嘉玲以外のキャストは大きく若返り！■

『王朝の陰謀 判事ディーと人体発火怪奇事件』は、通天閣ならぬ通天仏の建造・崩壊と人体発火事件、中国最初の女性皇帝・則天武后誕生の裏に渦巻く王朝の陰謀がストーリーの軸だったから、はじめて聞く話ばかりだった。他方、同作の登場人物は、則天武后を演ずるのが劉嘉玲（カーリーナ・ラウ）なら、中国のシャーロック・ホームズこと判事ディーを演ずるのは劉徳華（アンディ・ラウ）だったし、則天武后が最も信頼する美しき側近で、『ベルサイユのばら』におけるマリー・アントワネット王妃を守る近衛連隊長オスカル

ような存在の静児（チンアル）を演じていたのは、人気絶頂の美人女優・李冰冰（リー・ビンビン）だった。さらに、劉徳華と同期の俳優・梁家輝（レオン・カーフェイ）が通天仏の建造に従事する労務者のまとめ役・沙陀（シャトー）役として登場していたから、俳優陣はみんな有名で手厚い布陣だった。

それに対して、判事ディー・シリーズの第2作となる本作でディー役を演じるのは、台湾出身の趙又廷（マーク・チャオ）。その良きライバルであると共に、良き仲間となる当時の中国の最高裁判所にあたる大理寺の司法長官ユーチ役には、中国上海出身の若手イケメン馮紹峰（ウィリアム・フォン）を配している。また、龍王に貢物として捧げられる、本作の紅一点イン役には、中国上海出身の若手美人俳優・楊穎（アンジェラベイビー）を配している。また、今は半魚人の怪物にさせられているものの、もともとは朝廷御用達の名門茶屋・清心茶房の御曹司だったユエンは韓国出身のイケメン俳優・金范（キム・ボム）が演じ、中盤以降、ディーの助手として行動を共にする医官の沙陀（シャトー）は、中国遼寧省出身の林更新（ケニー・リン）が演じている。このように、劉嘉玲以外のキャストは、第1作とは打って変わって大きく若返っている。

ちなみに、すべてを中華思想で考える中国では、周辺の異民族はすべて「東夷」「南蛮」「西戎」「北狄」として語られるが、本作で唐帝国が敵視する扶余は東方にある国。その島を支配し、毒蜂や呪いの虫・蠱を操って唐帝国の打倒を画策している男が雀義だ。こちらあたりのストーリーは、『300 スリー・ハンドレッド』におけるペルシャVSカルタゴ・アテナイのストーリーと同じく、歴史モノとして面白いから、そんな視点でしっかりお勉強を。

もっとも、ツイ・ハーク監督の最新作『ドラゴンゲート 空飛ぶ剣と幻の秘宝』に4人

の美女を登場させてくれたことに大感激した私としては、本作では楊穎一人しか美女が登場しないのが不満。それは、ストーリー性重視のため仕方なかったかもしれないが、インとユエンの純愛（悲恋）だけでなく、せめて第1作で李冰冰が演じた静児と同じ、男装の麗人くらいは登場させて欲しかったと思うのだが・・・？



©2013 HUAYI BROTHERS MEDIA CORPORATION ALL RIGHTS RESRVED.

■□■やはり真実の解明には科学や医学の力が・・・■□■

去る8月5日に報道された、理研こと理化学研究所の副センター長・笹井芳樹氏が自殺したというニュースにはとにかく驚かされた。STAP細胞の存否や小保方晴子チームが発表した論文の真偽という問題の迫りも大事だが、それ以上に大事な科学的真実の解明という視点が、笹井氏の自殺騒動によってボケてしまうのが心配だ。しかし、本作の中盤で展開される、宮廷侍医ワン（陳坤／チェン・クン）の活躍ぶりを見ていると、唐の時代は真実の解明に科学や医学の力が活用されていたことがよくわかる。もっともそれは、物事をトコトン合理的に追求していくディーと、ひよんなきっかけでその助手として働くことになった医官シャトーの着眼点の良さによるものだ。

ユエンはもともと朝廷御用達の名門茶屋・清心茶房の御曹司だが、詩人としてすごい実力を持っていたため、当時男たちの人気の的となっていたインと恋に落ちることになった。そんな彼を、体内に入ると人体を支配する呪いの虫・蠱によってその姿を半魚人の怪物に変えてしまったのが、半年前に東島からやってきた雀義だ。ユエンはその治療法を教えてもらうのと引き換えに、朝廷に上納する雀舌茶の門外不出の製法を教えてしまったそうだから、もし雀義が皇族や大臣に納める雀舌茶に蠱を盛ったら、唐帝国はどうなるの？ つい先日には、中国・上海福喜食品工場での保存期限切れ肉の問題が世界の注目を集めたが、雀義の狙いがもし実現すれば、そこから発生する問題の大きさはその比ではない。

「頭を叩き割ってみるか！」。ワン医師のそんな言葉によって、ディーやインたちによって運び込まれた半魚人のユエンへの治療が始まり治療法の解明が進められたが、まさにここにこそ科学や医学の力が不可欠だ。しかし、雀舌茶を飲んだことによって毒を貯め込んだ身体を回復させるには、どんな薬が・・・？ワン医師はそれを童貞の男の尿だとらんだが、さてその効用は・・・？

■□■ツイ・ハーク監督流の「何でもあり！」に拍手！■□■

7月20日に観た、チリでロシア系ユダヤ人の子として生まれたアレハンドロ・ホドロフスキー監督が、80歳近くになって、回想録としてあらゆる映画づくりの技法を自在に操って作った『リアリティのダンス』（13年）は、何とも摩訶不思議な映像とストーリーだった。また、7月30日に観た、引退宣言をした台湾の巨匠・蔡明亮（ツイ・ミンリャン）監督のラスト作品『郊遊＜ピクニック＞』（13年）も、ラストの驚異的な長回しにはビックリ！の作品だった。彼らは引退直前になってそこまで「何でもあり！」の映画を監督したが、ツイ・ハーク監督は制作費32億円、興行収入96億円という本作で、前作や『ドラゴンゲート 空飛ぶ剣と幻の秘宝』以上に好き放題に「何でもあり！」路線を徹底させた。

ワイヤーアクションも「これが極限！」というところまでやっているし、全編CGで貫

かれた巨大アドベンチャー作品はまさに映像づくりの魔術師と言える。日本では、山崎貴監督のCG使いが有名。大ヒットした『永遠の0』（13年）（『シネマルーム31』132頁参照）でもCGが多用されていたが、極彩色を駆使して再現された唐の首都・洛陽の街や龍王が棲む廟海にある蓮池、そして大理寺や清心茶房などの映像はユニークで美しい。さらに、冒頭の世界海戦シーン（？）やラストの世界海戦シーン（？）も、CGを駆使するには最適なテーマだ。残念なのは、日本では本作が3D上映されておらず、2Dしかないこと。こんな映画こそ、3Dで観れば迫力倍増することまちがいないのだが・・・。

■□■3匹目のどじょうは？白馬のシーンにも注目！■□■

『300<スリーハンドレッド>～帝国の進撃～』では、『3匹目のどじょう』を狙うとしたら、そのテーマはまちがいになくスパルタとアテナイが激突したペロポネソス戦争になるはずだ」と書いたが、判事ディー・シリーズは、既に第3弾の制作が決まっているらしい。前述した『キネマ旬報』の「INTERVIEW」によれば、ツイ・ハーク監督は「シリーズ第3弾は今、20ぐらいアイデアがあるんだが、全2作と全く違ったテイストになるだろう。時代背景としては2作目と同じ、若かりし頃のディーを描き、宮廷料理の要素も入ってくると思う」と語っている。

『300 スリー・ハンドレッド』シリーズは、あくまで歴史上の事実を前提とした活劇モノだが、ディー判事シリーズは中国版シャーロック・ホームズさえ登場させれば、あとは何でもありのストーリーが可能。さらに、時代考証がどうのこうのと言うややこしい話も一切抜きで、ツイ・ハーク監督が「俺はこんな映像をつくりたい！」と言えば、それですべてオーケーだから、とにかく何でもあり！前作の「亡者の市」のシークエンスは『オペラ座の怪人』（04年）を彷彿させた（『シネマルーム28』122頁参照）し、本作のインとユエンとの純愛は『美女と野獣』のそれを思い出させるもの。また、本作の冒頭とクライマックスで描かれる東島の様子はジョニー・デップの海賊役がピッタリだった『パイレーツ・オブ・カリビアン』シリーズを彷彿させるものだ。したがって、現在ツイ・ハーク監督の頭の中で構想が描かれている、判事ディー・シリーズ第3作はとんでもない内容の映画になることを期待したい。

ちなみに、『300<スリーハンドレッド>～帝国の進撃～』では、紀元前5世紀のペルシャ戦争におけるサラミスの海戦のクライマックスで、主人公テミストクレスが馬に乗って船と船を駆け巡るシーンが登場したことに、驚かされた。そもそも、海戦をするための軍船の中に、なぜ馬を乗せるの？そう思っていたが、実はそんなシーンが本作のクライマックスにも登場するから、さあ、お立合い。一体何のためにディーは白馬を軍船の中に？そして、この白馬は一体どんなシーンで活躍することになるの？そんな、超ありえぬシーンは、あなた自身の目でたっぷり。

2014（平成26）年8月13日記